



第2図 佐屋利遺跡と周辺の中世城館跡（『京都府中世城館跡調査報告書』第1冊に加筆）

まとめ

今回の調査では、15世紀の後半頃に掘られ、16世紀末頃に人為的に埋められた戦国時代の巨大な堀を発見しました。

見つかった堀の規模が非常に大きいこと、堀の北東側に隣接して「茜屋敷」の小字が残ること、楽焼が出土していることを考えると、この堀は、丹後一色氏家中の有力者の居館に伴うものと考えられます。

この堀が掘られた背景としては、この時期、守護一色氏の家臣団の勢力争いと若狭武田氏の丹後侵攻により、丹後国が不安定な情勢となっていたことが考えられます。

堀が埋められた時期は、織田信長の命を受けた惟任（明智）光秀、長岡（細川）忠興が丹波・丹後に侵攻する時期にあたります。天正10年（1582）の本能寺の変の後、一色五郎が長岡忠興に宮津城で殺されたことを契機に、丹後一色氏は滅亡します。

堀が大量の土砂で人為的に埋められていることは、天正10年の丹後一色氏滅亡後に行われた細川氏による城割り（破却）の実態を示すものである可能性が考えられます。

この時期の丹後の城館遺跡には、山城が数多く知られていますが、今回の発見で、地表面には痕跡が残されていない平地居館も営まれていたことがわかったことも大きな成果です。



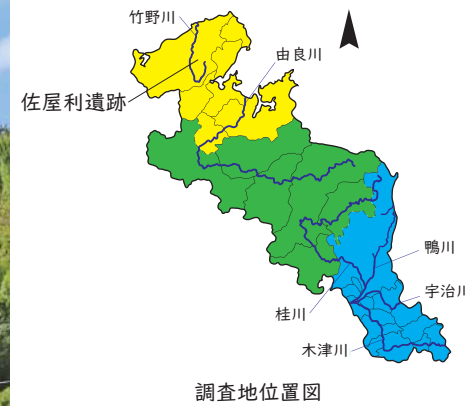
写真4 楽焼（黒楽茶碗）

楽焼：千利休の侘び茶の嗜好を反映して、手づくねで成形し、小規模な窯で焼かれた陶器。

京埋セ現地説明会資料23-3  
令和5年10月28日(土)

# 佐屋利遺跡（第3次調査）

調査遺跡 佐屋利遺跡  
調査場所 京都府京丹後市峰山町荒山  
調査期間 令和5年6月19日～令和5年11月上旬（予定）  
調査機関 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター



佐屋利遺跡は、竹野川右岸の丘陵先端に位置する遺跡です。これまでの調査で、弥生時代のムラや平安時代末～鎌倉時代の荘園領主の屋敷とみられる遺構が見つかりました。今年度の調査では、戦国時代の領主居館のものとみられる幅8m以上、深さ約6mの巨大な堀が見つかりました。

表紙写真：佐屋利遺跡7区全景（東から）



# 丹後の戦国時代略年表

| 西暦   | できごと   |
|------|--|
| 1503 | 守護代延永春信(のぶなが)と加悦城主石川直経(いしかわ)との争いの混乱に乗じた若狭の武田元信(たけだ)が管領細川政元(ほそかわ)の支援を受け丹後に侵攻。                       |
| 1507 | 細川政元が京都で暗殺される(永正の錯乱)。  |
| 1513 | 亡くなった一色義有(いっしき)の後継者をめぐって、一色九郎(いっしき)を擁立する延永春信と一色義清(いっしき)を擁立する石川直経の抗争が激化。加悦城の戦いで敗れた一色義清と石川直経は若狭に逃れる。 |
| 1517 | 一色義清と石川直経が若狭の武田元信、越前の朝倉孝景(あさくら)の援軍を得て丹後に帰還。  |
| 1519 | 一色義清が家督を継承。  |
| 1580 | 織田信長の命を受けた惟任(明智)光秀(これとう)と長岡(細川)藤孝(ながおか)が丹後を攻略。丹後は藤孝に与えられる。   |
| 1582 | 本能寺の変。光秀に同調する動きを見せた一色五郎を、長岡忠興(ながおか)が宮津城で謀殺し、丹後一色氏が滅亡。その後、城割りが行われる。                                 |

# 令和5年度の調査概要

今回、戦国時代の堀や溝・素掘りの井戸が見つかりました。堀は花崗岩の地山を急角度で掘り込んだもので、深さは約6mに及びます。この堀の北側が居館の内部と推定されます。堀内の北側に地山を掘り残した張り出し部があり、内側には張り出しに沿った溝と井戸が見つかりました。この張り出しは居館の施設と考えられます。出土遺物には、輸入陶磁器、瓦質土器、国産陶器などがあります。



写真3 堀埋土の堆積状況

# 埋め立てられた堀

堀の堆積状況を観察すると、下層(黄線より下)では、堀が土砂の流入で埋まるたびに掘り直した様子が見え、堀の維持管理をしていたことがわかります。一方、上層(黄線より上)は、大量の土砂で人為的に埋め戻されて、堀としての役割を終えたことがわかります。その時期は、出土遺物から16世紀末頃と推定されます。



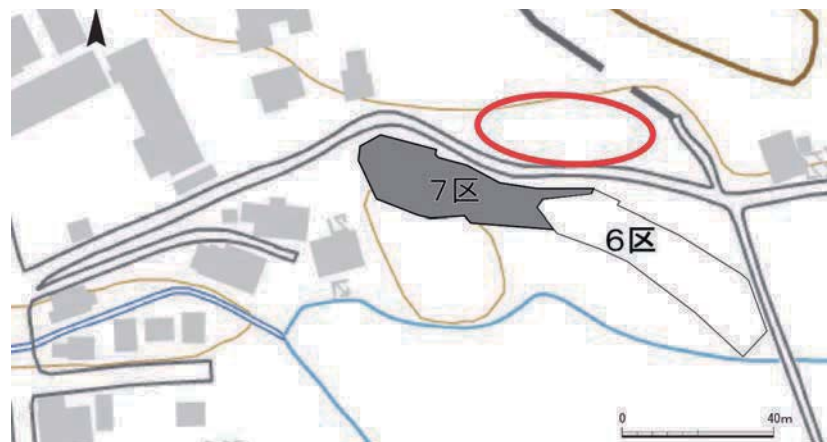
写真1 7区全景空中写真(上が北)



写真2 堀近景

# 丹後地域最大の堀

今回見つかった堀は、幅8m以上、深さ約6m、確認できる範囲で長さ約36mを測り、丹後地域で見つかった中世城館の堀で最大のものとなります。堀の北岸が調査区外に及ぶため、堀の平面形は確定できません。現状では、調査区中央付近にある北からの張り出し部が堀の幅を狭めているように見えますが、張り出し部の東と西で堀が北に分岐している可能性も考えられます。



第1図 調査区位置図

# 地名に残った居館の名前

今回発見した堀は、地形図や地表面の観察で見出すことは不可能で、発掘調査によって、埋もれた歴史を掘り出すことが出来ました。では、堀が守っていた居館はどこにあるのでしょうか? そのヒントとなるものが、小字名です。調査区の北東側、赤丸で囲った場所の小字は、「茜屋敷」と呼ばれています。断定することはできませんが、堀の発見と合わせると、このあたりに居館があったと考えられます。